

新潟県立村松高等学校創立七十周年記念講演、一九八一年十月二七日

卒業後の三十年

東京大学工学部教授 工学博士 大橋秀雄

今年の二月に小鷹校長先生が東大の私の部屋にお見えになり、「七〇周年記念の折に何か話をして下さい」とおっしゃいました。大変名誉なことだと思ひまして、話の内容は後で考えることにし、気軽に引き受けさせていただきました。さきほど講師選定のいきさつについて校長先生のお話を伺いましたが、それほど大変な検討をして決められたということを全然知りませんでした。何をお話するか決めかねておりましたが、今日のこの日が一日一日と近づいても、どんなことをお話しすれば皆さんのためになるか名案が浮かばない。今日はいきあたりばったりで、私が卒業後にたどった道でありのままお話しすることで責任を果たしたいと思ひます。

今日は後輩の生徒諸君にお話しすることが目的であります。ここにたくさんお集まりの来賓の方々にはお聞き苦しい所があるかと思ひますが、どうぞお許しいただきたいと思ひます。私は皆さんの方のお父さんの年代かと思ひます。今年五〇歳。もっと若いお父さんを持つている人も、もっと上のお父さんを持つている人もいるかと思ひますが、だいたい私の歳ぐらいが平均だと思ひます。ですから今日の話は、お父さんのたどってきた道をお父さんから聞くような気持で聞いていただきたいと思ひます。

私がこの村松の地で最初に思ひ出すのは、敗戦の年の昭和二〇年八月の初めの頃のことです。十全村の新屋という所に父の実家があり、そこに居りました。夜、南の空が赤々と燃え上がり、長岡が空襲にあつて焦土と化した晩でした。実はその同じ晩にもうひとつ焼かれている所がありました。当時私が所属していた東京・八王子の陸軍幼年学校が、空襲を受けて全焼し仲間が何人か死にました。中学二年の時のことです。御存知ないかも知れませんが、陸軍幼年学校というのは、陸軍の軍人になるための入り口のような学校です。父が軍人で昭和一九年に北京で戦死しておりました。小さい頃から「お父様の跡をついで立派な軍人になりなさい」と言われ、今で言う洗脳を受け、私もすっかりその氣になっていました。

「本土決戦が近いから、故郷（くに）へ帰つて別れの盃を交わして来い」と言われ新屋に帰りました。そこには母と姉と弟が疎開してきていました。「お別れに来たのだからご馳走を作つてあげよう。何でも食べたいものを言いなさい」といわれドーナツと答えました。今どきドーナツなんて、と皆さんは見向きもしないかも知れませんが、あの頃ドーナツを作るのには粉を集め油を集めなければならず大変でした。いろいろ集めてドーナツを作つてくれましたが、そのドーナツを食べ過ぎてお腹をこわしてしまいました。本来ならば空襲で焼かれている幼年学校へ帰つておるべきところをお腹をこわして帰れなかつたばかりに、長岡が焼ける空を眺めることになったわけです。それが私と村松との一番最初のかかわりあいです。ですから今でもドーナツを見ると恩があるように感じます。もしドーナツを食べていなかった

ら死んでいたかも知れませんが。

やがて八王子で八月一五日の敗戦を迎えました。幼年学校を離れ、それぞれ父母の待つ故郷へ帰ることになりました。敗戦になるということは、陸軍幼年学校の先生たちは前もって知っていたようです。敗戦を迎えたらこんなことを言われました。「これからは大変厳しい時代がやってくるだろう。しかし、君達がそれを乗り越えなければならぬ。これから故郷へ帰ってしっかり頑張りなさい」その言葉を貰って帰ってきました。列車の連結器に乗っかり、破れた幌にぶら下がってやっと新屋の母のもとにたどり着くことができました。

そして村松の中学へ入れて貰うことができました。二十年の九月に村松中学の二年生に編入させて貰いました。それがこの学校との縁の始まりです。入れて頂いたのは、円満寺住職であられた川井先生という英語の先生のクラスでした。東京で生まれ育ったため、新屋からここまで一里の道のりを毎日往復することじたいが大変なことでした。朴歯の下駄を履いて通学するということも、冬、雪の中を通うことも大変でした。今から考えますと、そのお陰で足腰が強くなりました。年をとってきましたけれども、歩くことにかけては今でも若い人にはひけを取りません。そのようにしてここでの生活が始まりました。

やはり一番最初に思い出すことは、バレーボールをよくやっていたことだと思います。本当は選手にして貰えるほど運動神経があったわけでもないのですが、比較的背が高かったものですから前衛に並べておくには丁度いいということでも仲間に入れて貰いました。冬になるとスキーをよくやりました。島掛先生という大変厳しい体操の名物先生がいらっしやいまして、裏山をスキー場にしてジャンプ台を造り、それを飛ばすというのです。今の体操の先生はそんな乱暴なことをさせるかどうかわかりませんが、みんな飛んでは殆んどお尻から着地するということをやりました。夏には水泳をやりました。プールがなかったものですから、堤まで泳ぎに行ったものです。昔は体力がありました。疲れを知りませんから、日が暮れたから泳ぐのを止めようといった感じでした。村松時代が一番よく思い出すのは体を鍛えたということだと思います。今でもその恩恵を十分蒙っています。

勉強の方はどうだったか。さきほど校長先生は私のことを大変ほめて下さいましたが、私は秀才か努力家のどちらでしょう。私にはひとつのプリンシプルしかありませんでした。それは分からないことがあったら放っておかないということです。教室で先生が話して下さることが分かればそれでいい。分からないことがあったら、その日のうちに分かるようにしておくことです。そうすれば試験があってもそれほど気にすることは無い。先生から怒られるような成績を貰うことも無い。分からないことはその日のうちに片付けておいたという意味では真面目な生徒だったのかも知れませんが、秀才というには程遠いんじゃないかと思っています。

私にも得意な学科と不得意な学科がありました。数学とか物理は得意な学科で、殆んど何もしくとも教室で話を聞いているだけで済みました。図画とか音楽とか芸術に関する学科は私の不得意とするところでした。それが今、機械工学という機械的な学問へ進んでしまった原因かも知れません。国語もあまり得意ではありませんでした。数学には答えが一つしかありません。私は頭が単純にできています。ですから、数学は一つの答を出して安心していられますが、国語のように感情とか、

判断を問われるものはどうも不得意でした。いろんな人がいろんな答を考えるのに、一つの答に丸をつけるのはおかしいじゃないかという気持がありました。

国語を教えていただいた長谷川先生は大変字の上手な先生でした。授業中は長谷川先生が黒板に何か書かれると、一生懸命それを真似てノートや紙切れに書いていました。ですから私の字は長谷川先生の字を真似て格好をつけたものです。皆さんも字のうまい先生の真似をすることが、字に格好をつけ、金釘流から脱するひとつの方法だと思います。そんなことをしながら学生生活を過ごしました。父が戦死していたし、その上村松の大火で全てを失ってしまったため、高校生の頃は経済的に一番苦しい時期でした。仲町という所のつき当たりに波辺牛乳店がありました。下の姉がその一階を借りて美容院を開いて一家の生活を支えていました。私も母から「姉がこんなにして働いているんだから、お前も早く就職して家を助けなさい」と言われればそうせざるを得ないような状況でしたが、「学資を助けてあげることが出来ないけれども頑張るだけ頑張ってみなさい」と言って貰ったおかげで大学に進むことが出来たという訳です。さつき校長先生から「十月から受験勉強を始めなさい」というお話がありましたけれども、それはやや伝説くさいところがあります。もっと前から勉強していたような気がします。高三になった時ぐらいから大学へ行くこうと考えていたように思います。あるいは他に向かって宣言したのが十月だったかも知れません。

大学の受験勉強をどんなふうにしたかお話ししましょう。一番大切なことは、前にも言ったように、授業の分からないことを放って置かないことです。毎日教室で先生方から教わったことを全部片付けておけばよいのです。高校の教科書を見ると難しいことがたくさん書いてある。あんな難しいことが全部分かったらたいしたものだと思うほどです。皆さん方は習っていることをちゃんと分かるようにしておけばそれで殆んど十分な筈なんです。ただ人間にはそれぞれ得意、不得意があります。私は国語とか歴史とかいったものが不得意でしたから、もっぱらそういったものを重点的に勉強し、得意な数学や物理は放っておきました。

勉強の仕方にも個人によって違いがありますね。長い時間かけてじっくり確実に覚えてゆく人と、覚えるものはさつきと覚えるけれども忘れるのもさつきと忘れる人もいます。私は一度にたくさん覚えるのが得意です。その代わり忘れるのも早いのです。例えば学校の教科書で覚える英単語だけでは不足ですから、古本屋から英語の小説を一冊買ってきます。知らない単語が百個出てくるまで読み、その単語をノートに書きとめておきます。そして翌日ノートを眺め思い出せない単語があったらそれにバツをつけておく。翌々日眺めてみるとバツのついた単語のうちまたバツをつけなければならぬものが出てくる。そういうふうにして完全に覚えるまで諦めないでいると、一日に百個の単語を覚えることができるわけです。それをひと月間繰り返すと三千個、三ヶ月で一万個。自分の専門に関する単語とか表現能力は、確かに今の方が高校を出た時よりも格段に上達しているかも知れませんが、基本的な単語の量は高校を出る時あたりが最高だったと思います。皆さん方は若いしポテンシャルティーを持っていきますから、やる気にさえなれば単語量をどんどん増やすことができます。それからよく、「君は参考書をたくさん持っているんじゃないか」と言われましたが、お話ししたようにそんな余裕があった訳ではありません。しかし、

一冊はあったと思います。本はたくさんあればあるほど安心して中味を見る気を起こさない。それよりもむしろ、一冊の本を隅から隅まで日の届かないところはないというまでに完全に片付けてしまうと、何冊も持っているよりはるかに力がつきま

す。定評のある参考書には要点が漏れなく書いてあります。試験を出題する側から言いますと、良い問題を出そうと思うと、良い受験参考書に書いてあることの発展、応用のような問題になってしまい勝ちです。ですから何もそんなにたくさんの本を漁る必要もなく、一冊の本をとことんまでやるのが重要ではないかと思えます。

私の学生時代を思い出してみますと、授業をよく聞いたと思えます。それが一番の勉強であるわけです。私にも二人の子供がいますが、「ちっとも勉強しないじゃないか」という月並みな言葉を吐いて「しまった」と思うことがあります。親の立場で子供の勉強を見る時に、家に帰って机の上で何かやっていると、子供は勉強していると思う。けれども一番の勉強は学校にいる時です。学校において授業を受けている時が最大の勉強ですから、場合によっては家で何もしなくたって子供は、きちんと勉強していることがあり得るわけです。何も家へ帰って机にかじりつくだけが勉強じゃないという気がしません。しかし学校で分らないことがあったら、その日のうちに片付けるために机に向かっているのであれば立派な勉強だと思えます。そういう意味で言うなら私は勉強したのかもしれませんが。

中学四年の終わりに「君たちは明日から高校二年生だ」と言われました。というのは学制の切り換えで高校一年を経験しないですぐ高校二年に編入されることになり、一年もうけたような気がしました。いつのまにか高校生になったというわけです。高校第二回の卒業生は二年間高校生でしたが、第一回の卒業生は一年間だけ高技生でした。そして三年生になって受験を迎えました。

当時一番上の姉が東京にお嫁に行っていました。一番安上がりに勉強するにはどうしたらいいかと考えたなら、姉の家に居候できる東京の方が生活し易いということもあって東大に決めたわけです。担任の先生は、新潟大学なら大丈夫だろうと勧めて下さいました。今だったら模擬試験を受けて実力を試すチャンスがありますが、それによってお前はどこが適当だとランク付けをされるわけですが、私の頃はそういうふるいわけ制度が何もなかったもので、自分の好きな所を受けられたということです。試験問題は思ったより易しかったと記憶しています。受かったら、皆びっくりして大変喜んでくれました。

東大に行ってみて最初はシヨックを受けました。というのはよくできる頭のいい人がうじやうじやいて、何を聞いてもよく分かる、難しいことを聞いても分かったような顔をしている。世の中にはこんな人がたくさんいるのかとシヨックを受けました。

それから経済的なことですが、アルバイトをしながら学生生活をしなければならず時間が取られる。最初の一、二年はいささか気分が沈みがちでした。けれどもやはり自分が出来ることをするしかない。毎日聞く講義の中から理解できないという「借金」を翌日に残さないことを続けてゆくより仕方がない。そう思ってアルバイトと大学生活を両立させていったわけです。私は大変面白くない人間に育ったと思っ

ています。大学の時にもっとゆとりがあって、もっといろいろな遊びを覚えてお

けば趣味豊かな面白い人間になったと思うのですが、いささか大学の時に追われ過ぎました。

そういう状況で専門を何にするかということになりました。自分の専門というのは、一番楽して暮らせそうなものを選んでしまうのですね。またそれが一番良いと思います。らくして楽しみながら人生を送るには、自分が一番得意な分野に進めば良いと思うのです。私は大変無機的な工学部機械工学科という、およそ文学、芸術とは縁のない機械の世界を自分の専門として選んで大学を卒業しました。

卒業する時、ウェスト賞という優等賞に相当するものをあげると言われてびっくりしました。きら星の如く優秀な人が他にたくさんいるのに、どうして私のような人にくれるのかという気がしました。別に私が優秀だったという気はしません。私は同じやり方で通したにすぎず、或いは他の人より若干粘り強かったのかも知れません。そうして大学を無事卒業することができました。

今でしたら大学院へ行こうかと悩むところですが、私の弟がその頃新潟高校にいて大学を受験することもあり、早く自立しなければならず就職しました。石川島重工業でジェットエンジンを担当していた大学の先輩から「学位論文をまとめたけれども、自分で計算をしている暇がないから一分間一円で引き受けてくれないか」という話がありました。昔の方なら知っていると思いますが、タイガー計算器という鉄の塊りみたいな計算器があり、ジャリ、ジャリ回しながら数値計算のアルバイトをしました。一分間一円、一時間で六十円というアルバイトでした。

大学四年の夏頃でしたか、その先輩が「石川島という会社はこれからどんどん発展する会社だからひとつうちで働かないか」と言ってくれました。その先輩に大いに心酔していたものですから「じゃ、入れていただきましょう」ということで入りました。新入社員になり、初任給八千五百円也をいただきました。最初の月給で母にラジオを買ってあげたことを覚えています。

会社に入りますと、いろんなことをよく知っている先輩エンジニアがたくさんいてびっくりしました。大学で習うことは大変基礎的なことばかりで、会社に入っただけすぐ役立つようなことは教えてもらえませぬ。大きな機械を作ったり難しい機械を設計したりする先輩諸兄を驚嘆の眼で見ました。しかし一日一日と、先輩の知っていることを少しずつ引き継ぎ自分なりに解釈して自分のものにしていきますと、やがて箱の底まで見えてしまう状態になってしまいます。

今から三十年も前の日本の工業は、皆さんには想像もつかない状態でした。アメリカと日本では十倍の所得の差がありましたし、いろんな技術の隔たりは想像を絶するものがあつたわけです。ちよつと難しい機械になりますとすぐ技術導入ということになり、向こうに頭を下げて教えてもらうような状況でした。私は、これじゃしょうがない、世界に伍していくためには外国の先進国と同じような状況に日本を持って行かなければならないと考え、留学したいと思うようになりました。会社に勤めて一年半ぐらいたってからでしょうか。その頃はアメリカに留学する人はたくさんいました。私はドイツに行きたいと思いました。ドイツは同じ敗戦国ですが、伝統ある工業先進国のひとつでもありました。そこでドイツ政府の留学試験を受けることにしたわけです。

大学に入りますと、第二外国語を習います。第二外国語はドイツ語、フランス語、

ロシア語、中国語などの中から一つ選びます。私はドイツ語を選んできましたから、ドイツ政府の留学試験を受けるのはまあまあいい線をいっているわけです。しかし大学で習った第二外国語のドイツ語で面接を受け、口述試験を受けて入るのはなかなか難しいものです。その頃ドイツ政府は毎年十人の留学生を選んでドイツに招いてくれました。十人といっても、音楽から医学から物理から文学まで含めて十人です。すから、私のようにエンジニアリングをやっている人はたかだか一人か二人です。

こういう風にドイツ語の勉強をしたかという、まず一冊のかなり厚い本を読みました。私の専門の機械の本でしたが、一冊読み切りますとほとんどの必要なことばが一度は出てきます。しかし読み切らなければ完全にマスターできません。途中であきらめてはおしまい。苦しいところを頑張りますと一ページごとにだんだん辞引きを引く単語の数が減ってくる。そのうちだんだん速くなってついには読み終わる。読み終えた時に頻度の高い単語はほとんど出尽くしている。それ一冊を頑張って読み切ったことが、留学生試験に受かったひとつの理由だったと思います。

もうひとつの理由は、東大の教養学部でドイツ語を教えていた方が大変厳しい先生だったことです。すぐ指して答えさせる。まごまごしていると怒られる。厳しい先生に教わることの有り難みは後になって初めて分かるものですね。私もその後先生になったので、厳しい先生になろうと一生懸命に心掛けていたのですがなかなか難しい。やはり学生にエコニコしていい顔している方が易しいから、なかなか厳しい先生になれない。村松高校は厳しい先生がお揃いでしょうか。宿題をやつてゆかなかつたらどうなるんだろうと思うような怖い先生の有り難みは、後で良く分かるということをつくづくその時思いました。

ドイツに行き二年間留学しました。行った時にはあまりの差にびっくりしました。けれども学生時代と同じやり方で続けただけだったと思うのですが、二年間で向この博士号を貰うことができました。ドクターインジェニールというドイツの学位を貰うことができたわけです。日本の博士号には等級がありませんが、ドイツでは博士号にも優・良・可という点をつけるのです。少し自慢話になりますが、私は二十人に一人ぐらい貰う一番上等な学位を貰うことができて驚きました。私ははるばる東洋からやって来たので、審査の先生方が甘い点をつけてくれたのかなという気もします。向こうの人間の中に入れてもやり方は同じで良いのです。自分のできることを粘り強くやり通すというやり方で、世界中どこでも通ずるということをつくづく思いました。

ドイツに行くまでは女性にあまり関心がありませんでした。村松中学が村松高校になった時に村松女学校と合併になり、男女共学を初めて体験しました。眩しいような眼で新しくクラスメートになった女性達を眺めたことを思い出します。大学に入ってから女の子に関心がなかったと思います。どうしてかと言いますと、その頃の女の子はちっとも自分の意見を言わないので、付き合っても面白くない感じがしました。ところがドイツに行って女の子と話してみるとちよっと感じが違う。自分の意見をはっきりと言うし、胸を張っている。女の子に興味を示し始めたのはドイツに行ってからでした。また例の調子で分かるまで分かるうとやっていると、とうとう深みにはまり込んでしまい帰ってくる時はドイツの女性と婚約し、婚約指輪をして帰ってくる羽目になってしまいました。

あまり親を心配させたことはないと思っていきましたが、その時ばかりはさすがに母も反対して渋っていました。とうとうあきらめてくれました。私の同級生の中には話をそこまでしかなかった人がいて「奥さん、ドイツ人なんですか」と言う人がいます。実はその話はうまくゆかなかったのです。私は、先に日本に帰り、いろ周囲の状況を整えて一年ぐらいたったら呼び寄せるようにしようと思っていきました。一年たって予定通り婚約者が日本までやって来ましたが、彼女は日本で暮らす自信をなくしたのかドイツへ帰りました。やはりその頃の日本は貧しい国であり、欧米からやって来る人間にとって想像を絶するものがあつたと思います。日本で暮らす覚悟ができず彼女はそのまま帰ってしまいました。皆さんの時代は違いますね。今だったら状況は違っていたかもしれません。

留学からもどり、石川島重工業で再び設計の仕事をしてるうちに、東大から大学に戻って教えないかという話を持ち上がりました。会社としてはせっかくのエンジニアとして育てたわけですから手離したくなかったでしょうね。その頃の石川島の社長は土光敏夫さんでした。土光さんと大学の長老教授との間でトレード話がまとまって東大へ戻ることになりました。野球の選手でしたら契約金があるのでしようが、大学に戻ってもそういうものはゼロです。月給は逆に三分の二ぐらいに減りました。それからは大変平凡な生活で講師、助教授、教授となって毎日学生と研究、教育に明け暮れているという状況です。ですから波風があつたのは卒業してから十年間です。おそらく皆さん方もそうだと思います。人生の波乱はこれからの十年間にあつて、それで皆さんの進路がだいたい決まってしまうと思います。これからの十年間は皆さんにとって大変大切な時期じゃないかと思っています。

今度は大学の話をしましょう。皆さんも私に聞いてみたいことがあると思います。ひとりひとりから質問をお受けするのがいいと思いますが、時間がないので自問自答の形で話を進めます。「東大の先生は一週間に何回ぐらいい教えていますか」そんなことが最初の質問になるかと思えます。平均的な例ですと一週間に二回ぐらいいです。学部、大学院の学生に対する講義がいつぱん、大学院の学生に対する講義がいつぱんぐらいいが普通だと思えます。

「あとの時間は何をしていますか」とすかさず聞いてくれる人は大変正直な人です。しかし遠慮深い人は、その質問が喉まで出てきても口に出せないのです。週に二回、計四時間ぐらいい講義にかかりますが、それ以外は何をしているのか。本来ならば研究や講義の準備をしているはずですが、皆さんが大学に入ると、最後に卒業論文を書いて成果をまとめます。学生自身の勉強になると同時に、それが社会的にも役に立つようなテーマを与えて研究させることが重要な課題です。研究という白い上着を着てビーカーを振って何かをしている姿を思い浮かべるかもしれません。自分が手を下して研究する時間は若い頃しかなく、ある程度年を取りますといわば「手配師」に変わります。学部、大学院の学生たちがそれぞれに立派な研究ができるような状況を準備することがわれわれにとって研究するということなのです。しかし毎日そうやって過ごせば幸せですが、東京にいますと雑用が大変多い。

通産省とか建設省といった政府関係の委員会は第三者、中立者を必要なことが多いのです。例えばメーカーの代表、ユーザーの代表が集まって日本工業規格を作るということになり、必ず中立者と称して大学の先生がかけつけていって仲裁役を

する。そういう仕事が意外に多く、午後になると保険の外交員のようにあっちこち出回ってばかりいます。これは本来の使命からいえば好ましくない状況ですね。

肝心の研究は何をやっているのかといいますと、私は機械を専門としています。機械にもいろんな機械があります。皆さん方が野外で目にする建設機械もあるでしょう。冷蔵庫、洗濯機のように家庭に入っている機械もあります。自動車も機械です。電気を起こしているタービンも機械です。台所に水を送り込むポンプも機械です。それらの中で「流れ」を扱う機械が私の専門です。水や空気を流す機械、具体的には蒸気タービン、ジェットエンジン、ポンプ、水車あるいは風車のような「流れ」とエネルギーの関係」を専門にして、これらの機械の進歩のために研究を続けています。

最近になって日本の工業が昔に比べ随分変わりました。皆さんのお父さん方がちょうど皆さん方の頃は、アメリカとの間に十倍の差を感じ、この絶望的な差を果たしてクリアーできるか疑問で、半ばあきらめの心境でした。しかし今やだいたい追いつきました。それは皆さんのお父さん達が中心となって営々としてその変化を達成したからなのです。

十倍の生産力がある、十倍豊かであるといっても、彼らが十倍働いていたわけではありません。当時のアメリカ人を見てもものんびりしたものでした。それでいてなぜ彼らが十倍の出力を出し得たか。それは人間一人一人の個人の働きの差ではありません。十倍の差を作っているのは社会の「しくみ」なのです。例えば道路ひとつ造るのを例にとっても、シャベルを使うこしとしかできないとしたら大変な労働力がいらしますが、最新鋭の道路建設機械があったらたちまち舗装まで終わってしまうかもしれません。三十年前にアメリカはそういう機械を持っていた。われわれは持つていなかった。いわば蓄積の差が十倍という大きな生産力の差を作っていたんじゃないかと思えます。

しかしお父さんを初めとする先輩たちのお陰で、その差はもうほとんどなくなっ てしまいました。おそらく日本人がアメリカを見ていた眼で、今や中国の人が日本を見ているのではないかという気がします。中国の人たちは実によく働きます。しかし彼らの生産性は低い。やはり「しくみ」ができて上がっていない。中国が「しくみ」を作り上げるには、皆さんのお父さんたちがたどったのと同じような営々たる道のりを突破しなければなりません。

ところが皆さん方は幸いなるかな、お父さんが若い時立たされた状況とは違う状況にあります。ですから皆さん方の世界における使命というのは、お父さん方とは違っています。お父さんたちの世代は、要するにアメリカに追いつけばいいという時代だった。今やそうではない。アメリカはもはや手本にならない。日本という国をどのようににしたらわれわれにとって一番幸せであるかを考えるだけでは不十分です。世界の他の国々に対して、頼りになる国になることを同時に考えなければならぬ時代ですから、国際的な意味における責任のあり方が皆さん方のほうが難しいんじゃないかと思えます。これからどうするか、世界の中の日本をどうするか、皆さんの頭で考えて欲しいと思います。

最後にしめくくりに入りたいと思います。皆さん方は、これから波乱の十年間を迎えます。それが過ぎてしまえば、進路が決まって比較的人生は平穏になってしま

います。何かひとつ熱中するものを作りなさいというのが私のアドバイスです。自分は、何が好きかということが自分で分かってくると、自分の進路というものがおのずと決まってくる。働かなければならないのなら、なるべく自分の好きなことをして、苦にならないこと、そしてなるべく楽なことをして働きたいと思う。そういう働き場所がその人にとって一番大きな力を出し得る働き場所ですから、何も好きこのんで嫌いなものを将来の道に選ぶ必要はありません。自分を一番生かそうと思うなら、まず自分は何が好きなのかということをはっきりと分かなければならない。そういうものをつかり見つけて欲しいということが第一の点です。

それからもうひとつ。冒険心を持ちなさいということ。若いうちから安全第一なことばかりしていますと、あまりにもありきたりな人生になってしまいます。やはり若いうちは冒険心を持ってチャレンジすることが重要じゃないかと思えます。健康と理想と冒険心に裏付けられた皆さん方のこれからの十年間は、おそらく悔いのない十年間になると思います。

大変立派な校舎ができました。昔から考えると夢のような校舎です。しかしかに校舎が立派であってもこれが冷え冷えとしていたのではちっとも意味がない。高校の生活というのは、ひとつの青春ののるつぼのようなものです。皆さん方は村松高校というひとつのるつぼの中にたたき込まれています。そのるつぼに薪をどんどんくべて熱い環境を作ることが先生方の役割です。先生方は外から薪をくべて皆さん方がるつぼの中で自分で燃焼するように与熱してやる役割があります。中で燃えるのは皆さん自身です。私も村松高校というひとつのるつぼの中で燃えました。皆さん方もこの熱いるつぼの中で燃えているうちに、焼き物のように色が出てきて自分は、何色なのかということがだんだん分かってきます。それが皆さん方の将来の道のに繋がると思います。これから村松高校が立派な入れ物だけでなく熱いるつぼと化して、その中から意気に燃えた皆さん方がどんどん巣立っていつて八十周年をまためでたく迎えられることを切に希望します。どうもご静聴ありがとうございます。

昭和二五年三月本校卒業
現 東京大学工学部教授